

滋賀の文化情報誌

デュエット

Duet

2017 春 vol.123

対談

長浜曳山祭の 過去と現在

中島誠一 × 市川秀之



新撰 淡海木間撰 67

「日本藩史」草稿 北川舜治著

INFORMATION STATION 催し案内 2017 春

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内

■長浜市曳山博物館

住 所 長浜市元浜町14-8

連 絡 先 TEL 0749 (65) 3300
FAX 0749 (65) 3440

休 館 日 年末年始(12/29～1/3)、
展示替え等による臨時休館日あり

入 館 料 大人600円、小中学生300円

アクセス JR北陸本線「長浜駅」から徒歩約7分、レンタサイクルは、
駅および周辺施設で貸し出しあり



対談

昨年12月1日(日本時間)にユネスコ無形文化遺産に登録された「山・鉾・屋台行事」(国内の33行事で構成)の一つ、長浜曳山祭の曳山行事。

長浜市曳山博物館の中島誠一前館長と、長浜曳山祭の調査をもとにした論文集『長浜曳山祭の過去と現在』の編者である滋賀県立大学人間文化学部の市川秀之教授に、長浜曳山祭の歴史と現状について、語り合っていました。

取材／編集部 写真／辻村耕司

長浜曳山祭の過去と現在

中島誠一 × 市川秀之



長浜市曳山博物館前館長
中島誠一さん

なかしま・せいいち／1950年、長崎県生まれ。長浜城歴史博物館館長、長浜市曳山博物館館長を歴任。2017年2月退職。



滋賀県立大学人間文化学部教授
市川秀之さん

いちかわ・ひでゆき／1961年、大阪府生まれ。専門は民俗学・博物館学。滋賀県文化財保護審議会委員



4月第1土曜日におこなわれる曳山交替式。曳山博物館に展示されていた出番山が自町に戻り、翌年の出番山が博物館に入る(長浜市曳山博物館提供)

調査開始からユネスコ無形文化遺産登録まで

まずは、お三方それぞれの長浜曳山祭とのなれそめからお話いただけますか。

中島 関わった最初は、長浜城歴史博物館の学芸員になった昭和59年（1984）、入れ替わりの前任者が担当するはずだった特別展「襖絵の美」^{※1}が決まっていたので入ってすぐの4月に「あなたがやりなさい」と言われて。特に襖絵は、観客から見えない部分だということもあって、最初とまどいましたね。

それまでも曳山は数回見ていましたが、学芸員の仕事として関わると、おいそれとはいかないという印象を持ちました。ある祭りを見に行つて、帰って原稿を書くことと思つたら何も書けないなんてことも、よくある（笑）。

——どこから書けばいいやら、という感じでしょうか。

中島 長浜曳山祭は、非常に規模が大きくて複雑ですからね。13組あるので、一力所から見ているだけでは、全体像をなかなか把握できない。

市川 まさにそれは思います。

中島 困っちゃいますね。それは他所からの見物客も大勢来るような都市の祭りの特徴です。ただ、耳に入る音、目に映るものは印象深く、曳山が自分の前を通つていく時のギリギリギリという音だったり、曳山の上部がきしんで微妙に震える光景はよく覚えています。

それと、見送幕にヨーロッパ渡来のもが使われているので、すごくエキゾチックな感じを受けました。私は出身が長崎県佐世保で「長崎くんち」のように南蛮文化の影響を受けた祭りになじみがあるのですが、長浜の曳山も、日本・中国・ヨーロッパの

いろんなものが混ざっている。それが一種独特の雰囲気をつくりあげていたんだなというイメージが強くあります。

その後、平成22年（2010）に曳山博物館に移りましたので、ずっと関わってききました。

——市川先生が、最初に長浜の曳山に関わられたのはいつになりますか。

市川 曳山博物館に調査の打ち合わせに初めて行ったのは平成22年でしょうか。

中島 市川先生たちは、東日本大震災が起こった平成23年3月11日、ちょうど曳山博物館にいらつしやつて会議をなさっていましたね。

市川 そうです。あれは忘れません。

中島 会議の途中で私が、「いま大変な地震が起こっていますよ」とお伝えしたのを覚えています。すぐ、その年の祭り自体が行なわれるかどうかからないという話になりました。こういうときに祭りをしているものかと考えもあつて。特に裸参りはいけないのではないかとか。

市川 神輿の渡御は中止になり、裸参りは自粛を決定した中老と、やりたい若衆の間で衝突がありました。これは印象深かったですね。

その年から毎年4つの山が出るので、3年で12基を一通り拝見させてもらって、途中からは研究者というより、ただのボランティアになって、山曳きもしたので（笑）。

中島 そりやすこいな。

市川 そうなったのも東日本大震災の影響なんです。その年までは自衛隊の人たちがかなり助けになっていたのですが、被災地への救援活動で一気に人手不足になったんです。翌年から、山組以外の人も呼ぶこと

※1 襖絵 曳山舞台後方の、外からは見えな
い襖や天井にも、江戸から明治にかけての
絵師による装飾画が描かれている。

※2 見送幕 曳山の背後を飾る幕。16世紀に
ベルギーで制作されたゴブラン織りを使用
している曳山が2基ある。

※3 裸参り 若衆が祭りの無事や役者の健康
などを祈願して、八幡宮から豊国神社まで
練り歩く行事。

※4 人行事 山曳き（山を曳く）のリーダー。
かつて遠隔地から人を集めていた時代には、
人を集める責任者が務めていた。

になって、県立大学へも依頼がありましたので、私と今回の本の共編者の武田俊輔先生がいれば人行事みたいなかたちで、学生を連れていくようになったんです。

——昨年は、大きな出来事として、ユネスコの無形文化遺産に登録されたわけですが、そこまでの経緯を教えてくださいませんか。

中島 当初は国指定の重要無形民俗文化財の曳山は、順番にユネスコの無形文化遺産になつていくと考えられていたんです。祇園祭（京都府）、日立風流物（茨城県）、高山祭（岐阜県）、秩父祭（埼玉県）と指定の順に。長浜の曳山も昭和54年（1979）指定と古いですから、順繰りに登録されるだろうと言われていました。ところが、外国人から見たら、みんな曳山は同じに見えるからダメという話になって、仕切り直したんです。

市川 先生と武田先生による調査では、記録撮影もおこなわれたのですが、これはユネスコ無形文化遺産のための撮影でした。

——最初からそうだったんですか。

中島 最初からユネスコ登録ありきでした。市川先生らによる調査がユネスコ登録申請への基礎でした。調査の2年ほど前に県から指示があつてのものです。

市川 ユネスコでのプレゼンテーション用

に映像記録が必要なんです。14分に編集されたものが作成されました。もとの全体の撮影時間は200時間におよんでいます。

中島 山組ごとにハードディスクが配られましたね。

市川 すべての映像記録がデータベース化されて、「○○山の登り山」というようにに検索すれば、映像を見ることができるようです。それとは別に、広報用にストーリー性、テーマ性のある短編が3つ制作されました。**中島** シャギリ編とかあって、曳山博物館でも上映しています。

市川 40分ぐらいのものをよく流していましたね。

中島 残念ながら、あの40分の長いDVDを回すと、最後まで見てくれる人は少ない。もちろん、お好きな方は最初から最後までじっくり見て帰られるのですが。

市川 あれはよくできていて名作だと思います。見た方がいい。

——そうした映像のおかげもあって、**日本時間で昨年の12月1日(現地時間11月30日)に登録されました。決定したのは深夜2時だったそうですが。**

中島 それは忘れられない。前日の夜からずっと待機していましたからね。他の候補

——年間を通じて曳山にふれることができる拠点として、**平成12年(2000)に曳山博物館は開館していますが、これはどういった経緯で。**

市川 昭和54年(1979)に国指定重要無形民俗文化財に選定された時、収蔵展示館を建設する案はあったそうですね。その時、すでに修理ドックを設ける案もあって**中島** 以前、まだそれぞれの山蔵で修理していた頃に、私も立ち会ったことがあるの

地に問い合わせても、どこもわからなくて**市川** ユネスコの委員会が開かれたアディスパバ(エチオピア)が政情不安定で情報が入ってこなかったそうですね。

中島 そうなんです。夜中の2時ぐらいになりそうだなって、みんな寝静まった深夜に「万歳」もなろうということ、私は自宅が湖南市なものですから、いちいち帰るのはいやだったんですが、翌日朝8時に集まることに決まったので渋々高速でいったん帰りました(笑)。そして、7時頃には館にまた来て8時に「万歳」。

——登録で何が変わったのですか。

市川 ユネスコの制度というのは、一銭もお金は出ません。逆に言ったら、日本の国の制度のなかできっちり保護されている、継承されているものを登録しようという発想ですね。

——**メリットは、国内外への知名度が向上して観光客が増えるぐらいですか。**

中島 それは長浜市も意識していますね。ただ、それが増える観光客は一過性のものでしかないとも、個人的には思うんですよ。曳山に関する市民講座を開いたり、曳山検定を実施したりして、着実にファンを増やすための取り組みが大事だと思います。

曳山にかかせない職人技の伝承に貢献

ですが、山蔵の中はめちゃくちゃ暑いんですよ。夏のことだから、家に帰ってみたら体中に発疹(はっしん)ができていたぐらい。

曳山博物館にある修理ドックの存在は、技術を継承するためには大きかったですね。通常保管されている山蔵の中だと狭いから部分的にしか修理できなかったんです。それが修理ドックだと全体をできるのです。

市川 曳山博物館のドックは温度や湿度の管理ができるので、漆職人さんの家のム口



↑館内で上映されている紹介映像は、市川教授らの調査の映像記録がもとになっている

(室)の構造の大きなやつというか。漆は乾燥してはいけけないので、非常に湿度の高い状態をつくる必要があるんです。

中島 長浜の場合、見送幕以外は地元で修理できるというのが自慢です。

市川 選定技術者になっているのは、みんな長浜の仏壇屋さんですね。塗師(ぬし)・漆職人が2人、銚金具師(さうきんぐし)が1人。

中島 彦根仏壇も有名ですが、長浜の浜仏壇とは塗り方が違うんです。曳山は、長浜の頑丈な塗り方でないと駄目なんですよ。

市川 曳山博物館は、他の地域のヤマの修理にも使われていますね。

中島 最近だと三重県桑名の石取祭で使われる祭車の修理を依頼された職人さんが曳山博物館に連絡してきて、部屋を借りてやっています。

市川 福井県小浜の放生祭(ほうぜまつり)の山車を修理するのにも使われたり、ちょっとした修理の拠点になっていますね。

中島 構造として長浜の曳山より古い形だとされる長浜市宮司町の「颯々館(ささくわん)」も修理しました。

——**他の地域で、こうした拠点としての博物館はあるのでしょうか。**

中島 今回ユネスコ登録された33行事でも、意外と拠点施設や団体を持っていますね。

対談 | 長浜曳山祭の過去と現在

◀ 1階展示室の巨大なエアタイトケース（内部は温度・湿度が一定に保たれている）に収められた実物の曳山
 ▶ 修理ドックでの曳山の解体修理作業のようす。右下は銑金具師の辻清さんによる作業。下左は三重県桑名市の石取祭の祭車の修理（5点とも長浜市曳山博物館提供）



公益社団法人になっているのは長浜と祇園祭だけで、あとは任意団体です。

市川 会館や展示館があるところは少ない。中島 岐阜県高山市の高山屋台会館でも、広い展示室内にそのまま置かれているだけです。長浜のように空調管理をきちんとして展示しているところは、あまりないはず。電気代でも年間600万円かわかりますが、相応の負担になるのは最初からわかっていました。

市川 じゃあ、もし博物館がなかったら、どうなっていたんだろうという話ですね。

中島 本当に曳けない山が出てきたでしょう。そういった点で、修理ができる、情報発信ができる博物館の存在は長浜にとって大きいと思います。

ただ、あまり先が明るいわけじゃない。銑金具の辻さんには跡継ぎがいらない。漆職人さんの片方も「子どもに継がせない」とおっしゃってるし。もう一人の職人の娘さんの彼氏が興味を持ってくれたらありがたいんだが……とか、そのぐらい次の代はわからない状態です。

市川 それは大変だ。私は山曳きをしていて思いましたが、最近の整備された道路は曳山にはよくないですね。

中島 コンクリートの石畳では、車輪も傷むはず。でも、その車輪に使えるだけの木が日本にはなかなかない。

市川 日本は漆もなくなってくるし。

中島 修理には国産の漆を使う必要があるのですが、国産はとても高い。

市川 使えとご指導がある（笑）。膠にかわもなくなってくるし。

中島 それは難しいところで、文化財の仏像などと同じで、曳山の工芸の修理は昔の手法で完璧にというのが指導の方針です。

市川 全部漆を取って塗り直すようなやり方はダメなんです。残せる部分は残しながら、最低限必要なところだけやる。

中島 だから山組の人には、「お金をかけているのにきれいになっていないじゃないか」と言われる（笑）。

それから、曳山の場合、仏像と違って、つねに使われている一種の道具なんですね。舞台障子でも、きれいに直した翌年の舞台で子どもが破ったなんてことがある。そりゃあ、演技で刀を振り回すんだから。



——つづいて話題を、市川先生らの『長浜

曳山祭の過去と現在』に移したいと思います。

市川 平成23年（2011）の調査で、たくさんの人と組織がからまり合って長浜の曳山祭を支えている姿を目にし、非常に感心しました。私は民俗学が専門ですが、社会学や人類学の研究者もいっしょだったこともあり、人と組織という視点から祭りの姿を記述すると見えてくるものがありそうだと思います。古いところでは、米山俊直先生の『祇園祭—都市人類学ことはじめ』（中公新書）、それから同じく社会学者の松平誠先生の著作などが都市祭礼の変容を記録してきました。今回の本では、それに連なる視点で、戦後から現在にかけて、長浜曳山祭を支えてきた人と組織、地域について論じています。

——伝統的な祭りや芸能というところと、綿々と変わらぬ姿で受け継がれてきたと言いたいところですが、そんなことはありませんね。

市川 びっくりするほど変わっているんですよ。恥ずかしながら、私は長浜曳山祭が戦前までは秋祭りだったことも知らなかったのですが、戦争により昭和12年（1937）から10年以上にわたる中断があり、毎年12基が出ていたのが、4基ずつの出番山になると、変化しつづけています。

もう一つ驚いたのは、昔の方が都市的だったことですね。長浜の周辺村落からシャギリが来たり、山曳きは岐阜県などからも人がやってきたり、関わる地域が広範囲におよんでいました。これこそ長浜が豊かな街だった証拠だと思いますが、戦後はそうした周辺農村との関わりが減っていき、「長浜の市街地」に限定された祭りになりました。ここ半世紀というのは、長浜の山



長浜曳山祭の過去と現在

祭礼と芸能継承のダイナミズム

市川秀之・武田俊輔 編

書店にて
発売中

発行：おうみ学術出版会
発売：サンライズ出版
定価：3400 円＋税

【収録論文】

第1章	序説・長浜曳山祭の歴史と現在	市川秀之
第2章	長濱八幡宮における七郷の現在	中野洋平
第3章	長浜曳山祭における祭りと囃子、山組と囃子方	東 資子
第4章	シャギリと周辺農村	上田喜江
第5章	三役と湖北農村部の娯楽	小林 力
第6章	歌舞伎芸能の地方伝播	橋本 章
第7章	山組の組織の変化と今後	村松美咲
第8章	若衆—中老間のコンフリクトと祭礼のダイナミズム	武田俊輔
終 章	ウチーソト関係からみた長浜曳山祭	市川秀之

組住民が、自分たちでシャギリを伝承したり歌舞伎をしたりする努力をされてきた歴史です。このプロセスも非常にもしろいと感じました。

——昔の方が都市的祭礼だったという部分をもう少し説明していただけますか。

市川 京都の祇園祭もそうですが、滋賀県内では例えば大津祭も、曳山の解体は、所有する町がやっていたのではなく、担当の村があったんです。「見建て」、「山建て」と言うのですが、つまり、準備も芸能も周辺農村に任せて、曳山の町の住民はそれを見て楽しむだけ。それがもともとの都市祭礼です。戦後はそれができなくなってくるんですね。経済力が相対的に衰えたことや農村地域の住民の多くが勤め人になるといった変化など、いくつもの要因がからんで、他地域の人によってもらっていたことも、ほとんどを曳山を所有する町の住民でやる祭りに変化していくんです。現在の姿というのはもともとの姿ではなくて、戦後になって展開した姿なわけです。これは長浜や大津にかぎった話ではなく、今回、ユネスコで登録された33のお祭りの

大半は都市祭礼ですから、そのほとんどが同じような経過をたどっています。

戦後は特に観光化と文化財保護の動きが加わって、どこもが保存活動に取り組みますが、長浜はその効果が一番典型的に表れているように思います。

——長浜は、祭礼を継承するうえで成功例と言えるわけですか。

市川 そうですね。一つの成功例ですね。中島 いまお話があったように、戦争で曳山祭が中断し、戦後初めて子ども歌舞伎が上演されたのは、昭和23年（1948）に長浜市制5周年記念として4つの曳山でおこなわれたものなのですが、演じたのは東浅井郡小谷村丁野（現長浜市小谷丁野町）の振付師・二代目富士松山楽とそこの子どもたちだったんです。

——昨年、曳山博物館の企画展でも子ども歌舞伎復活の立役者として、紹介なさっていましたね。

中島 山楽さんという人は体が弱くて農業ができず、村でお菓子屋を営んでいて、歌舞伎芝居が趣味だったんですね。これは、中断後の対応策で外部から呼ばれたという



↑東浅井郡小谷村（現長浜市湖北町）伊部で盛んだった村芝居のようす。演目に「太功記尼崎段」とある（昭和24年頃、小谷伊部自治会提供）

のでもなく、もともと長浜の子ども歌舞伎は、山組の子もただけが演じていたわけではないんです。農村部には浄瑠璃を語る、義太夫を語る、歌舞伎を演じる文化が娯楽としてあって、曳山祭は、彼らの発表の場であったのです。曳山上で演じるのは、ある種のステータスでもありますからね。山組住民はお金だけ出して、こしらえた棧敷席で豪華な弁当などを食べながら、それを見物した。いわば旦那衆の祭りです。

それが、先生がおっしゃるように、山組住民だけで維持する時代になると、昔からそうだったと解釈しちゃう。だから、私がこんなこと言うとな、いつも怒られる（笑）。

市川 今回の本もその歴史を前提に書かれていますから。子ども歌舞伎の三役を担った人々、素人愛好家からプロまでさまざまですが、彼らについては、今回の本の第5章と第6章の論文がまとめてあります。

それからシャギリ（囃子）については、第3章と第4章の論文にくわしく書かれています。昔は周辺農村からの雇いシャギリ

りだったものが、そうした芸能の文化が衰退したために、山組内でそれを継承する取り組みがなされたんです。

中島 そうです。例えば、長浜の布施という地域は神楽をやっていて、笛などの演奏が得意でした。そういう人たちがお手伝いとして曳山祭に来ていた。長浜の周辺の農村では、オコナイ行事などでも笛を吹く地域があります。

市川 どのお囃子も似ていますね。宮入りのときの笛とかと。太鼓踊りの演奏にしても、あれは長浜から普及したのでしょうか。

中島 そう考えた人が多くいますが、逆かもしれません。

市川 ベクトルがどっちなのか。

中島 長浜市余呉町上丹生の茶わん祭で聞ける、稚児の奉納の掛け声や演奏はむしろ長浜よりは古いかもしれない。「イヤーウエイオーハツ」というのは、どこかで聞いた掛け声だなどと思ったら、岐阜県垂井町にある南宮神社の神事芸能（国の重要無形民俗文化財）とほとんど同じなんです。だから、茶わん祭のからくり山について見送幕も、長浜より古いものがある。

市川 祭りの形態は、茶わん祭が古いと思います。歌舞伎というのは時代的には新しいものですから。もちろん長浜は米原の曳山に影響を与えてもいるわけで、県外でいえば、福井県美浜町早瀬の春祭りが出る曳山は、長浜に大工さんをやって作り方を学ばせたというのがわかっていますね。影響関係のあった地域は、岐阜・三重、北陸は若狭・石川・富山あたりまで広がるといえます。

ユネスコに登録された33行事でもおっしゃった地域が密集地帯になっています。

市川 大工も三役ももうろしますからね。中島 それが民俗学の難しいところで、地

↓現在、10の山組ではシャギリ方に女子小中学生が参加している（滋賀県立大学曳山まつり調査チーム提供）



※5 三役 振付・太夫・三味線を担当する人のこと。長浜曳山文化協会は、三役を地元で養成するため、平成2年（1990）から三役修業塾を開講している。

※6 シャギリ 祭りのお囃子のことで、笛・摺り鉦・太鼓を用いて演奏され、場面ごとに曲が異なる。

元に伝わる由緒を信じられない場合が結構あるんですよ。例えば、垂井にある曳山は長浜のものを見に来て自分のところでやりたいと思って始まったとされていますが、本当かなと思ってしまう。

市川 予想外のルートでの交流があったりしますから。峠を越えてとか。

中島 そうなんです。私なりの印象ですが、江戸時代の宿場間の情報伝達のスピードというのは思いのほか速い。京都の桂川で中年男性と若い女性が入水自殺したとニュースになれば、その話が一気に広がって『お半長右衛門』のような芝居ができて。われわれが考えている以上ですね。

少し話を戻しますが、近年の変化としてシャギリに女子小中学生が参加できるようになりましたね。

市川 昭和40年代には録音テープをラジカセで流していたのですが、昭和46年（1971）に長浜曳山祭囃子保存会が発

足して、小中学生に楽譜でシャギリを教えるようになりました。本書にもあるとおり、女子の参加には当初反発もあったんです。今も曳山は女性が触ったらダメなんです。

中島 触ったら大変なことですよ。

市川 祭りには女人禁制ですから、子ども歌

担い手と維持費に残る今後の課題

――本書の第7章は、長浜の中心市街地で1980～1990年代に起こった担い手不足の問題を扱っていますが。

市川 郊外大型店の出店などにより、いわゆる人口のドーナツ化現象が進む中、2000年代になって山組の町外出身者の若衆が増えていきました。その経過を丹念にたどって、若衆への聞き取りなども交えて課題と展望も見いだそうとしています。

――第8章で武田先生は、祭りの現場に入り込んで若衆と中老の間の衝突（コンフリクト）をテーマになさっています。

中島 武田先生の論文は、おもしろいですね。

市川 武田先生は自分が若衆になりましたから。若衆は周りを盛り上げるために新しいものを取り入れたり、独自性を出そうとしますが、中老は、それまでのやり方を守らせようとしています。すると、衝突が起こるわけです。こうした衝突は、中老の側が若衆だったときもあつたはずで、それを解決して、本日を迎えてなかくやくるところに達成感が生まれる。

――お二人も祭りの現場でそうした衝突に出合われますか。

市川 それはもう、しょっちゅうあります。準備段階から。

中島 親子ですつとけんかしている人とかいますからね（笑）。

市川 毎年起こる裸参りに関わる衝突は、

舞伎の稽古でも、稽古場には女の人は絶対入れません。役者に選ばれた6歳ぐらいの子を、お母さんが稽古場まで連れてくるけど、2階には上がれないんです。

――だから、修理する職人さんも男性でなければいけないわけですね。

一つの見どころでもあります。もちろん衝突することが目的ではないのですが、結果的にそうなる。でも次の日にはちゃんとやるというのが祭りを成り立たせる構造です。

中島 それによってモチベーションが、ずっと祭りに向けて上がっていくんですよ。交替式あたりから、だんだん上がっていく。昨年6月から毎月（4月を除く）曳山博物館で「山組マンスリー」と題して、山組の人たち自身が、自分たちの曳山を紹介する展示をやっています。これでも、それぞれの山組が張り合ってますね。あの組がこんなものを出していたから、自分のところもつとよいの出そうとか。

市川 若衆のメンバーで伝承委員会という組織もあり、若い人でもよく勉強されていて感心します。それに皆さん、雄弁というか、堂々と自己主張をされますね。これは祭りの持つている教育的機能みたいなもので、案外大事かもしれないと気づきました。ただ、先の工芸技術の伝承の問題もあわせて、後継者を個人に任せるのではなく、ある程度、行政の支援が必要ですね。

――現状でもいくらか支援はありますね。そこはどうなっているのですか。

中島 政教分離ですから、行政は直接関わられません。曳山文化協会がフィルタールになっているわけです。

市川 神事にはお金は出せないんです。祇園祭は管理費や維持費の7～8割を国が補

助していますが、対象は山鉾行事で、神興の行事にはゼロです。長浜の場合も、芸能としての子ども歌舞伎が対象で、それを支える曳山についても補助が出ています。逆に、日本の祭りの原型の一つである大津市坂本の山王祭^{さんのおまつり}などは芸能の要素がないので補助対象になっていません。その辺は不平等が生じている部分ですが、何でもかんでも役所が関わるといいうのも問題ですし。

中島 難しいですね。特に最近は何所が関わると、費用対効果とか、そんなことばかり言うようになって。今年の7月に東京の国立劇場で子ども歌舞伎が公演することになりましたが、こまごまと入場者数とかの損得勘定を始める。ユネスコ登録のお祝いなのだから、担い手の人たちを大切に扱って、喜んでもらえばいいじゃないですか。

市川 最近は文化財よりも、観光方面に補助金が行ってしまっているので、余計にそういう見方が強まっています。

中島 文化はもうからなくて、とんとんだったらいい、もしくはちょっとぐらいマインナスでもいいぐらいの気持ちでないとうっていきません。

市川 そもそも長浜中心部でお店をやっている人は店を閉めて、山に出ているから（笑）。親子井で有名な「鳥喜多^{とりきた}」さんでも、曳山祭の期間に営業すれば、絶対もうかるのに、そういうことはしないんですね。

中島 当事者は、祭りを巨大なボランティアだと思っている。逆に行政の方がそれで金勘定をしはじめているんですね。ただ、長浜市にもよい動きはあって、最近、職員に祭りを体験させようとしています。休みの日に、山曳きのボランティアをさせたり。

市川 それはいいことですね。

――本日は興味深いお話をありがとうございました。（2017.3.13）

「日本藩史」草稿

北川舜治著

静里文庫蔵書

草津市立草津宿街道交流館館長

八杉 淳

「日本藩史」は、日本各地の藩主について記した歴史書で、静里文庫の蔵書として10冊の自筆草稿と、15冊の自筆校本があります。草稿は、マス目や縦罫入りの用紙に記されています。一方の校本は、舜治が開いた私塾「修文館蔵」の文字が刷られたマス目入りの用紙に漢文体で記され、校合の際の訓点など朱書が施されています。また、15冊に分冊され、それぞれが表紙を付して製本、調えられています。

この「日本藩史」は、明治12年（1879）12月に版權免許、同17年4月に「六書堂」から全8巻で出版されています。

「日本藩史」を著した北川舜治は、天保12年（1841）栗太郡部田村（草津市青地町）生まれ。幼少期から祖父

である浄光のもとで教えを受け、8歳のときには四書（儒学の基本となる4つの書物）を暗唱するなど、周囲からは奇童と呼ばれていました。安政6年（1859）、19歳で京都に遊学。山本榕堂の門に入り、経史や博物学を、その翌年には山本主善のもとで医学を、そして伊藤轡斎に儒学、高島晋斎、遠山雲如からは詩文を学んでいます。

文久3年（1863）、郷里に帰り、私塾を開くとともに、医者として開業。医師としての仕事に励むとともに、生徒を集め、和学や儒学を教えました。その傍らで自らも修史の志を立て、国詩や経史、西洋訳書を書写しています。

私塾を開いたのち、明治8年（1875）に滋賀県に出仕。史誌編纂兼学務担任や文書掛を務め、明治15年（1882）に、家庭の事情で県の仕事を辞職するまでの間、「日本文学志」全8巻、「日本外交志」全4巻、「経典纂纂」全4巻などを編著。明治20年には大阪住友吉左衛門の委嘱を受け、住友家歴代の家記をまとめた「垂裕明鑑」全31巻を編纂しています。その後も「滋賀県沿革志」「近江名所記」「瀬田川浚渫工事（瀬田川浚渫沿革記）」4巻などを滋賀県の委嘱を受けて著すなど、多忙な職務の合間に、自ら「柳暗花明舎」や「読我書屋」と名付けた書齋で、精力的に著作活動が続けました。そして、明治31年（1898）には、これまでの著作活動の集大成ともいえるべき、「私撰国史」175巻を編纂し、宮内省に献納しています。

北川舜治が生涯62年にわたり、自身が著した草稿・著作や収集した蔵書数百冊が、戦後、彼の郷里に鎮座する小槻神社に寄託され、舜治が号とした「静里」を冠し「静里文庫」と名付けられて今日に至っています。

●この資料も展示した企画展「静里文庫へようこそ!!」が当館にて5月21日(日)まで開催中です。[10ページ参照]



入館料：大人300円、小中学生150円
休館日：月曜日（ただし5/1は開館）
お問い合わせ先：TEL 0748 (48) 7101

開館1周年記念 所蔵作品展

4月16日(日)～8月20日(日)
中路融人記念館



中路融人
「朝霧」

開館1周年を記念して、これまでの展示で人気が高かった作品や未公開の素描などを展示します。5月20日午後1時30分からは中路融人先生によるギャラリートークが開催されます。
入館料：大人300円、小中学生150円
休館日：月曜日（ただし5月1日、7月17日は開館）、6月13日(火)～23日(金)、7月18日(火)
お問い合わせ先：TEL 0748 (48) 7101

シベリア抑留

— ユネスコ世界記憶遺産舞鶴引揚記念館所蔵品より —

4月29日(祝・土)～9月3日(日)
滋賀県平和祈念館

昭和20年8月9日、ソ連軍の攻撃に直面した満洲の日本軍将兵(60万人以上)は、捕虜としてシベリアなどのソ連各地に収容され、過酷な労働に従事させられました。舞鶴引揚記念館が所蔵するシベリア抑留・引揚関連資料はユネスコ世界記憶遺産に登録され、今回はその資料の一部(複製)と滋賀県平和祈念館所蔵の資料によってシベリア抑留の実態を紹介します。

入館料：無料
休館日：月曜日・火曜日（祝日の場合は開館）

■オープニング・セレモニー

4月29日(祝・土) 午前10時～

講演：山下美晴氏（舞鶴引揚記念館館長）

■特別展示関連映画上映会

『帰還証言—ラーゲリから帰ったオールドボーイたち—』

前編(終戦編) 5月20日(土) 午後1時30分～

後編(抑留編) 6月17日(土) 午後1時30分～

お問い合わせ先：TEL 0749 (46) 0300

今回の展示では、「長浜曳山祭シャギリ伝承の救世主 笹原昭太郎」「戦後の子ども歌舞伎復活の立役者 二代目富士松山楽」「湖北が生んだ名太夫 豊竹常磐太夫」「長浜の三役育成を手がけた最後の名人 豊澤重松」ら、戦後の長浜曳山祭を支えた人物の功績を紹介します。

入館料：大人600円、小中学生300円
休館日：開催期間中は無休
お問い合わせ先：TEL 0749 (65) 3300

せいり 静里文庫へようこそ!! — Welcome to Seiri's Library!! —

開催中～5月21日(日)
草津市立草津宿街道交流館



北川舜治（静里）「日本藩史」校本（草津市蔵）

草津出身で明治時代の大教育学者・歴史学者として知られ、「第二の近江聖人」とも呼ばれる北川静里にまつわる資料とともに、彼の生涯と業績をご紹介します。静里は医業のかたわら、市内小学校の開校に尽力し、人材育成のために私塾・修文館を開設するなど、草津に大きな影響を与えました。

入館料：大人200円、高校・大学生150円、小中学生100円

休館日：月曜日
お問い合わせ先：TEL 077 (567) 0030

商家の美術展

開催中～6月23日(金)
近江商人博物館

東近江市ゆかりの画人・野村文挙や邸松雲外の作品をはじめ、店員たちから晩年の楽しみと商家の主人に贈られた小野竹喬「三保の富士」など、近江商人の商家で大切に保管されていた屏風や掛軸など、当館所蔵の逸品を紹介します。芸術文化振興の担い手でもあった近江商人が選んだ作品をお楽しみください。

りょうせん 霊仙山 — その信仰と山麓のくらし —

開催中～4月23日(日)
米原市伊吹山文化資料館



「霊山寺之古図」(個人蔵)

伊吹山に対峙してそびえる霊仙山(標高1094m)。その山岳信仰については、椿井政隆が創作した偽文書によって長く地域史に混乱を招いてきました。今回の企画展では、霊仙山の山岳信仰について限られた文献・絵図・遺構・伝承などから迫ります。

入館料：一般200円、小中学生100円
休館日：月曜日
お問い合わせ先：TEL 0749 (58) 0252

曳山を支える人たち

開催中～5月7日(日)
長浜市曳山博物館



これまでの長浜曳山祭の歴史をひもとくと、曳山の巡行や子ども狂言(歌舞伎)の中止だけでなく、祭りさえ中止になることが幾度となくありました。それでも先人たちは祭りに対する誇りと情熱によって復活を果たしてきたのです。

長浜曳山まつり 子ども歌舞伎 東京公演

ユネスコ無形文化遺産に登録された山・鉾・屋台行事の中でも、子ども歌舞伎を披露する稀有な存在である長浜曳山まつり。歌舞伎の聖地・東京国立劇場で、大人顔負けの舞台を、ぜひご覧ください！



会場 国立劇場小劇場
東京都千代田区隼町 4-1

開催日 7月9日(日)

お問い合わせ先 TEL 0749 (65) 6521 (長浜市観光振興課)

煌 KIRAMEKI

けいぼくきりかね
—中村佳陸截金作品展—

4月15日(土)～6月4日(日)
愛荘町立歴史文化博物館

截金文様で装飾された金剛輪寺の平成大曼荼羅(金剛界八十一尊大曼荼羅図)公開にあわせ、その制作で高い評価を得た絵仏師・中村佳陸師の仏画と工芸作品を展示し、截金文様が描く究極の美と技の世界を紹介します。

入館料：一般300円、小中生150円

休館日：月・火曜日(祝日の場合は開館)

■ワークショップ 截金ストラップづくり
5月14日(日) 午後1時30分～3時

場所：歴史文化博物館研修室

定員：25名(要電話申込) **材料費**：500円

お問い合わせ先：TEL 0749 (37) 4500



〔阿弥陀二十五菩薩来迎図〕(個人蔵)

開館25周年記念特別展 信長のプロフィール

4月29日(祝)土～6月4日(日)
滋賀県立安土城考古博物館



「革命児」として人気の高い織田信長。しかしそのプロフィールや人物像は、必ずしも正しく理解されているとは言えないようです。信長とは、ほんとうはどんな人物だったのでしょうか？ 織田氏発祥の地や信長をとりまく一族、その城の変遷、天下統一へのあゆみと近年の「信長観」の変化を、肖像画や歴史資料などをもとに紹介しながら、新たな「信長像」の魅力を考えます。

入館料：大人890円、高校生630円、小中生410円、県内高齢者(65歳以上)450円

休館日：月曜日(ただし、5月1日は開館)

■記念講演会

5月14日(日) 午後1時30分～

「信長が目指した天下静謐とは？」

講師：金子拓氏(東京大学史料編纂所教授)

5月21日(日) 午後1時30分～

「信長以前の織田一族」

講師：高木久史氏(安田女子大学准教授)

会場：安土城考古博物館セミナールーム

定員：140名(当日先着順) **参加費**：500円

■関連行事

5月27日(土) 城郭探訪「安土城を歩く」

定員：20名(要予約) **参加費**：1500円(入館料・入山料を含む)

お問い合わせ先：TEL 0748 (46) 2424

滋賀県博物館協議会創立35周年を記念して ガイドマップ(ポスター)をつくりました！

滋賀県博物館協議会が、平成29年(2017)に創立35周年を迎えたのを記念して、多くの方に滋賀県の博物館施設にご来館いただけるよう、県内各地の博物館を紹介したポスターを制作しました。

滋賀県の地図に各博物館施設の名称と代表する作品を表示し、どのような博物館がどこにあるのか一目でわかるポスターです。

本ポスターは下記からダウンロードすることができます。

<http://sam.shiga.jp/images/35th-guidemap.pdf>

このポスターをご覧いただき、ぜひ県内各地の博物館施設に足を運んでいただけましたら幸いです。

※ダウンロードしたポスターは自由に掲示していただいてもかまいませんが、他の印刷物への無断転載は禁じます。



長浜曳山祭の過去と現在 祭礼と芸能継承のダイナミズム

市川秀之・武田俊輔 編
四六判上製本 総294頁 3400円＋税

神輿の選御を担当する「七郷」の存在、シャギリ継承への取り組み、歌舞伎芸能の地方伝播、若衆と中老の衝突が生むダイナミズムなど、変化しつづける都市祭礼の実相を考察。



織豊系城郭とは何か その成果と課題

村田 修三 監修／城郭談話会 編
B5判並製本 総448頁 5000円＋税

日本城郭史の中世から近世への転換を決定づけた「織豊系城郭」の実体を、歴史・構成要素・分布などにわたり整理するため、第一線で活躍する70余名の研究者による論考と67城の概要を収録。



岡町民誌

岡町民誌編纂委員会 編
A4判並製本 総200頁 非売品
開合先 守山市岡町84 竹原壽良

琵琶湖大橋取付道路の開通にともなう、昭和40年代からの宅地開発で人口が急増した守山市岡町の地域誌。時代別の変遷と、自然や風俗習慣など昔ながらの暮らしを紹介。(2017.3刊)



松宮商店とバンクーバー朝日軍 カナダ移民の歴史

松宮 哲 著
B5判並製本 総248頁 非売品
開合先 携帯 090-9878-4193 (著者)

カナダ・バンクーバー市で商店を営んだ松宮外次郎を祖父にもつ著者が、湖東地域からの移民の暮らしぶり、野球チーム・朝日軍の活動を追う。(2017.3.31刊)



淡海文庫 57 近江の古民家 素材・意匠

石川慎治 著
B6判並製本 総184頁 1200円＋税

重要伝統的建造物群保存地区4つ、重要文化的景観を6つ有する滋賀県の伝統的な建造物を、素材・意匠・建物から解説。滋賀県のみならず各地の伝統的風景の楽しみがわかり、古民家を見る目が養われる指南書。



近江の埋もれ人

中川祿郎・河野李由・野口謙蔵

角 省三 著

B6判上製本 総400頁 1900円＋税

井伊直弼の影武者・中川祿郎、松尾芭蕉の愛弟子・河野李由、蒲生野の鬼才画家・野口謙蔵ら「近江の埋もれ人」の評伝のほか、三浦綾子や白洲正子についての随想などを収録。



地域共生論

300人規模のアクティブラーニング

滋賀県立大学地域共生論運営委員会 編
A4判並製本 総160頁 1000円＋税

地域共生論は300人を超える人数でのアクティブラーニングを実践する滋賀県立大学の全1回生必修科目。そのノウハウと、具体的な授業内容や活用するワークシートを紹介したテキスト。



琵琶湖を巡る鉄道

湖西線と10路線の四季

写真・文 清水 薫

A5判並製本 総128頁 2200円＋税

滋賀県内はもとより全国で季節感のある鉄道写真を撮り続ける写真家・清水薫の鉄道写真集。ライフワークとして撮影した湖西線の写真を中心に、滋賀県内を駆けた列車を収載。



表紙写真 平成22年(2010)4月15日、御旅所に勢揃いした12基

長浜市と湖北6町の合併・新市誕生を祝い、修復中の1基を除き、集合した。今年の4月15日には、ユネスコ無形文化遺産登録を祝して13基が集合する。

編集後記 対談中では、中老と若衆の衝突の話が出てきましたが、今年はすべての曳山がそろうということで、心配なのが曳山どうしの衝突。中島誠一さんは、「昔の農村の曳き手と違って、最近はタメが効かないのか、ゴンと当たっちゃう」とおっしゃっていました。事故なきことを祈ります。⊕

Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1
サンライズ出版株式会社 Duet 編集部
TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先